



甲虫ニュース

December 1997

No. 120

COLEOPTERISTS' NEWS

日本産エンマムシ上科概説 VII^{註1}

—オオマメエンマムシ亜科 (チビヒラタエンマムシ族: チビヒラタエンマムシ属,
ハスジチビヒラタエンマムシ属, チャイロチビヒラタエンマムシ属,
ホソチビヒラタエンマムシ属), クロツブエンマムシ亜科—

大原昌宏

チビヒラタエンマムシ属

Platylomalus COOMAN, 1948

世界に 54 種, 日本からは 6 種が知られる。長楕円形で体長約 1.5–3.2 ミリで, *Eulomalus*, *Paromalus* に比べると大型。雌の尾節に種の特徴がでる。樹皮下に生息し, 立枯れや伐採木の表面を歩いていることも多い。樹木との関係や生態的なデータは少ない。

1(4) 鞘翅縁条 (marginal elytral stria) の先端は, 側方, 後方を経て会合部まで伸び, 後方中央角で曲がり基方へ伸びる。

2(3) 中胸腹板の横線は富士山の様な線となる。雌の尾節は深い溝をもつ。……………フジチビヒラタエンマムシ

3(2) 中胸腹板は横線を欠く。雌の尾節の先端は密に点刻され溝は欠く。……………ツヤチビヒラタエンマムシ

4(1) 鞘翅縁条は会合部まで達しない。

5(6) 鞘翅は粗く点刻され, 肩部分は大点刻による斜めの溝をもつ。中胸腹板に横線を欠く。……………オガサワラチビヒラタエンマムシ

6(5) 鞘翅は均一に点刻され, 大点刻は欠く。中胸腹板は横線をもつ (ヒメチビヒラタエンマムシは, 時折横線を欠く)。

7(8) 中胸腹板の横線は四角形。中脛節は 3 刺をも

つ。後脛節は 1 刺。雌の尾節は大きな目玉状の彫刻をもつ。……………クロチビヒラタエンマムシ
8(7) 中胸腹板の横線は, 緩やかな曲線, 時折中断される。中脛節は 4 刺をもつ。後脛節は 2 刺をも

つ。
9(10) 体長は 3.0–3.5 mm。前胸の縁どりは前方でほぼ完全。雌の尾節は縁部をのぞき不規則な溝の彫刻をもつ。……………オオチビヒラタエンマムシ

10(9) 体長は 1.8–2.3 mm。前胸の縁線は前方で広く途切れる。雌の尾節は一對の曲線からなる彫刻をもつ。……………ヒメチビヒラタエンマムシ
フジチビヒラタエンマムシ (図 2A, 3A, 4A, G)

Platylomalus fujisanus (LEWIS, 1892)

図説 H: 224; ÔHARA, 1994: 174 [再記載, ♂交尾器]。

体長 (前胸背前角から尾節先端まで; mm) 雄 1.62–1.97, 雌 1.56–2.01, 幅雄 1.00–1.18, 雌 0.99–1.14。ツヤチビヒラタエンマムシに似る。分布: 本州, 九州。

ヒメチビヒラタエンマムシ (図 2B, 3B, 4B, H) *Platylomalus mendicus* (LEWIS, 1892)

図説 N: 69; 図説 H: 225; ÔHARA, 1994: 177 [再記載, ♂交尾器]。

体長 1.87–2.23, 幅 1.14–1.34。クロチビヒラタエ



図 1. オガサワラチビヒラタエンマムシ
Platylomalus kusuii M. ÔHARA.

^{註1} M. ÔHARA, Taxonomic note on the superfamily Histeroidea of Japan, VII.

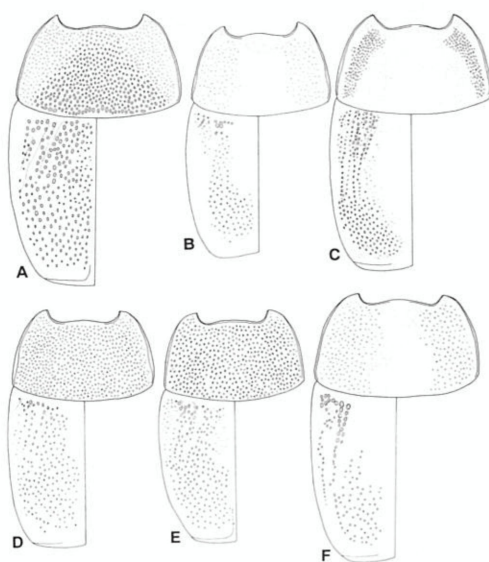


図2. チビヒラタエンマムシ属. A: フジチビヒラタエンマムシ, B: ヒメチビヒラタエンマムシ, C: オオチビヒラタエンマムシ, D: クロチビヒラタエンマムシ, E: ツヤチビヒラタエンマムシ, F: オガサワラチビヒラタエンマムシ. 前胸背と左鞘翅, 背面 (ÔHARA, 1994 より).

ンマムシに似る. 分布: 本州, 四国, 九州, 隠岐, 南西諸島, 沿海州, 中国, ベトナム, インド, 台湾, インドネシア.

オオチビヒラタエンマムシ (図2C, 3C, 4C, I)

Platylomalus niponensis (LEWIS, 1899)

図説 N: 69; 図説 H: 225; ÔHARA, 1994: 180 [再記載, ♂交尾器].

体長雄 2.52–3.17, 雌 2.65–3.01, 幅雄 1.47–1.90, 雌 1.60–1.77. 属内では日本最大の種で, 中胸腹板の横線と体長で他種と区別できる. 雌尾節は複雑な皺の彫刻をもつ. カツラの樹皮下. 分布: 北海道, 本州, 台湾.

クロチビヒラタエンマムシ (図2D, 3D, 4D, J)

Platylomalus persimilis (LEWIS, 1888)

図説 H: 224; ÔHARA, 1994: 184 [再記載, ♂交尾器].

体長雄 2.03–2.50, 雌 1.76–2.35, 幅雄 1.15–1.39, 雌 1.03–1.37. ヒメチビヒラタエンマムシと似るが, 黒色で, 中胸腹板の四角をした横線と中脛節の1刺をもつことで区別される. 雌尾節は円形の彫刻をもつ. 分布: 南西諸島, タイ (テナセリウム), ベトナム.

ツヤチビヒラタエンマムシ (図2E, 3E, 4E, K)

Platylomalus viaticus (LEWIS, 1892)

図説 H: 224; ÔHARA, 1994: 187 [再記載, ♂交尾器].

体長雄 1.64–1.91, 雌 1.45–1.77, 幅雄 0.95–1.13,

雌 0.95–1.08. フジチビヒラタエンマムシに似るが, 中胸腹板の横線と雌尾節の彫刻を欠くことで区別できる. 分布: 本州, 九州, 台湾, ハバロフスク州, オガサワラチビヒラタエンマムシ (図1, 2F, 3F, 4F, L)

Platylomalus kusuii M. ÔHARA, 1994

ÔHARA, 1994: 190 [再記載, ♂交尾器, 貯精囊].

体長雌 2.09–2.60, 幅雄 1.26, 雌 1.20–1.50. 鞘翅の肩部分に大点刻をもつこと, 中胸腹板の横線を欠くこと, 分布から他種と区別できる. 分布: 小笠原, ハスジチビヒラタエンマムシ属

Pachylomalus SCHMIDT, 1897

東南アジアから日本にかけて, 2亜属13種が知られる. 亜属は頭部の前頭条が前方で途切れるもの *Pachylomalus* (6種) と, 完全なもの *Canidius* (7種) に分けられる.

ハスジチビヒラタエンマムシ (図5)

Pachylomalus (Canidius) musculus (MARSEUL, 1873)

図説 H: 225, 40–25; ÔHARA, 1994: 193.

体長 2.08–2.57, 幅 1.27–1.72. 土壌中より採集される. 前胸背後方中央に「ハ」の字の溝をもつ. 前尾節には明瞭な横溝をもつ. 雌の尾節は先端が窪む. 体型は卵型で, マルチビヒラタエンマムシと似るが検索により区別は容易. 分布: 本州, 九州, 台湾, ミャンマー, ベトナム.

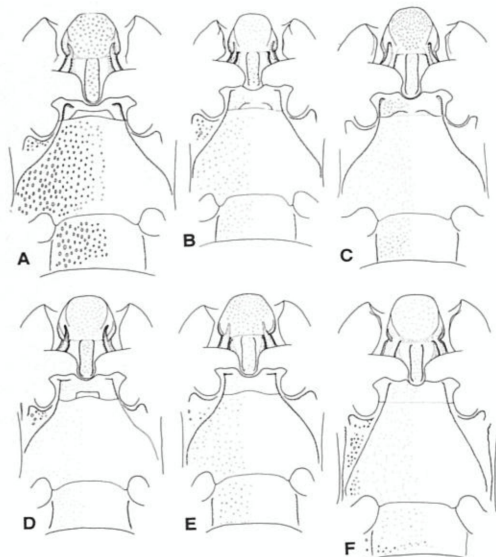


図3. チビヒラタエンマムシ属. A: フジチビヒラタエンマムシ, B: ヒメチビヒラタエンマムシ, C: オオチビヒラタエンマムシ, D: クロチビヒラタエンマムシ, E: ツヤチビヒラタエンマムシ, F: オガサワラチビヒラタエンマムシ. 前胸・中胸・後胸腹板. (ÔHARA, 1994 より).

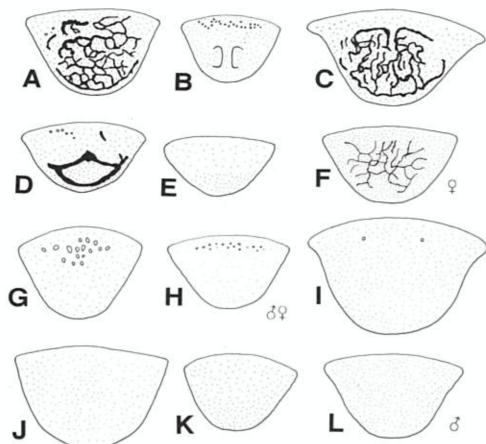


図4. チビヒラタエンマムシ属, A, G: フジチビヒラタエンマムシ, B, H: ヒメチビヒラタエンマムシ, C, I: オオチビヒラタエンマムシ, D, J: クロチビヒラタエンマムシ, E, K: ツヤチビヒラタエンマムシ, F, L: オガサワラチビヒラタエンマムシ. 尾節, A-F: 雌 (Hは雌雄), G-L: 雄 (OHARA, 1994より).

チャイロチビヒラタエンマムシ属

Eulomalus COOMAN, 1937

世界に24種, 日本に2種が知られる. 日本産は再検討がなされていない. 下記の種のほかに未記録, 未記載種が2種ほどある.

ミゾチビヒラタエンマムシ

Eulomalus lombokanus COOMAN, 1937

図説 H: 225. 分布: 南西諸島, ロンボク島.

チャイロチビヒラタエンマムシ

Eulomalus tardipes (LEWIS, 1892)

図説 H: 225. 分布: 南西諸島.

ホソチビヒラタエンマムシ属

Paromalus ERICHSON, 1834

世界に60種, 2亜属に分けられ, *Paromalus* (22種; 新旧北区) と *Isolomalus* (38種; 新熱帯区) がある. 日本からは3種が知られる. 雌の尾節に種の特徴がでる. *Platylomalus* 属に比べ小型.

1(2) 鞘翅縁条後端は会合線まで達し, 中央角で曲がり, 基方へ伸びる. …ホソチビヒラタエンマムシ

2(1) 鞘翅縁条後端は鞘翅中央角まで達しない. …コチビヒラタエンマムシ

この他に日本にはアカチビヒラタエンマムシがいる.

アカチビヒラタエンマムシ

Paromalus (Paromalus) omineus LEWIS, 1892

図説 H: 225. 標本未検討. 分布: 本州, ブータン?.

ホソチビヒラタエンマムシ (図6A, C, E)

Paromalus (Paromalus) parallelepipedus (HERBST, 1792)

図説 N: 69; 図説 H: 225; OHARA, 1994: 199 [再記

載, ♂交尾器].

体長雄 1.99–2.36, 雌 1.85–2.23, 幅雄 1.08–1.24, 雌 0.99–1.26. 厚みがあり筒状に近い体型. モミ, マツ, ブナ, ヤナギの樹皮下から記録がある. 雌尾節は横楕円の中央が基方に突出した彫刻をもつ. 分布: 北海道, 本州, ヨーロッパ, クリミア, コカサス, シベリア.

コチビヒラタエンマムシ (図6B, D, F)

Paromalus (Paromalus) vernalis LEWIS, 1892

図説 H: 225; OHARA, 1994: 201 [再記載, ♂交尾器].

体長雄 1.42–1.62, 雌 1.39–1.66, 幅雄 0.83–0.98, 雌 0.76–0.98. 雌尾節はハート型の彫刻をもつ. 分布: 本州, 四国, 九州, 南西諸島, 台湾, 沿海州.

1–3–8. クロツブエンマムシ亜科 *Abraeinae*

世界に23属390種が知られ, 5つの族に分類される. 日本には3族, ヨフシエンマムシ族 (*Acritini*), ムネミゾツブエンマムシ族 (*Plegaderini*), クロツブエンマムシ族 (*Abraeini*) が分布する.

族への検索

1(2) 後附節は4節からなる. …ヨフシエンマムシ族

2(1) 後附節は5節.

3(4) 前胸背側方に縦の溝をもち, ほぼ中央に横線をもつ. 前胸腹板にはX字状の陥没をもつ. 中胸と後胸の腹板は縫合線で区別されない. …ムネミゾツブエンマムシ族

4(3) 前胸背は溝をもたない. 前胸腹板にx字状の陥没はない. 中胸と後胸の腹板は縫合線で区別される. …クロツブエンマムシ族

1–3–8–1. クロツブエンマムシ族 *Abraeini*

世界に4属39種. 日本からはクロツブエンマムシ属3種 (1未確定種を含む) が知られる. このほかに *Abraeus* 属の未記録種が1種いる.

クロツブエンマムシ属

Chaetabraeus PORTEVIN, 1929

以前は *Abraeus* 属の亜属とされていたが, MAZUR (1989) により属へ昇格された. *Abraeus* 属とは次の形態, 生態の特徴で区別できる: (1) 前尾節

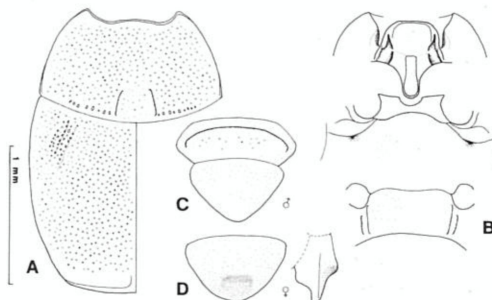


図5. ハスジチビヒラタエンマムシ. A: 前胸背と左鞘翅, 背面; B: 前胸・中胸・後胸腹板; C: 雄, 前尾節と尾節, D: 雌, 尾節 (OHARA, 1994より).

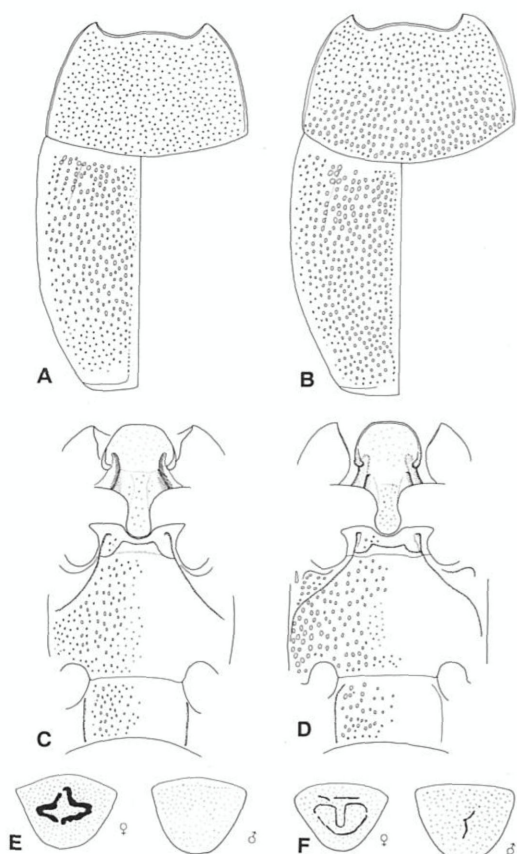


図6. ホソチビヒラタエンマムシ属. A, C, E: ホソチビヒラタエンマムシ, B, D, F: コチビヒラタエンマムシ. A, B: 前胸背と左鞘翅, 背面; C, D: 前胸・中胸・後胸腹板; E, F: 尾節 (ÔHARA, 1994 より).

が縦長で五角形をしていること, (2) 背面が強く凸状となりたいていは黒褐色か黒色, (3) 動物の糞や死体, 植物腐敗物にすむ. 背面に刺毛を散布し特徴的である.

1(2) 前胸腹板の両側には深い凹陷をもつ……………

……………クロツブエンマムシ

2(1) 前胸腹板の両側に凹陷はない.

3(4) 体は小さく 1.37-1.64 mm; 黒色で赤い金属光沢をもつ; 脚は赤褐色. ……クロツブエンマムシ

4(3) 体は大きく 1.84 mm; 黒色で緑色の金属光沢をもつ; 脚は黄褐色. ……………

……………クロツブエンマムシ属の一種

クロツブエンマムシ (図8A)

Chaetabraeus bonzicus (MARSEUL, 1873)

図説 H: 225; ÔHARA, 1994: 204 [再記載, ♂交尾器].

牛, 犬, 人糞に集まる. 分布: 北海道, 本州, 四国, 九州.

クロツブエンマムシ (図7A, 8B)

Chaetabraeus cohaeres (LEWIS, 1898)

ÔHARA, 1994: 208.

牛糞に集まる. 前種に比べ小型. 香港が模式産地. 分布: 南西諸島 (屋久島, トカラ中之島, トカラ宝島, 与那国島, 西表島). 台湾, 香港.

クロツブエンマムシ属の一種

Chaetabraeus sp.

ÔHARA, 1994: 209.

前2種に似るが, 前胸腹板の凹陷を欠き, クロツブエンマムシより体サイズは大きく, クロツブエンマムシと同じほど. しかし後胸腹板中央の点刻は後者より密, 全体に緑色の金属光沢をもつ. 一頭体しか採集されていないため保留となっている. 体長 1.84 ミリ. 分布: 西表島.

1-3-8-2. ムネミゾツブエンマムシ族

Plegaderini

3属30種が知られる. 日本にはムネミゾツブエンマムシ属2種が分布する.

ムネミゾツブエンマムシ属

Plegaderus ERICHSON, 1834

2亜属, *Hemitrichoderus* (1種; トルコ, キプロス), *Plegaderus* (24種; 新旧北区, 新熱帯区) に分けられる. 樹皮下に生息し, 他の林穿孔虫 (カミキリ, クチキゾウムシ, キクイムシ) などの孔道にいる.

1(2) 体は大きく 1.35-1.49 mm; 黒色; 前脛節は前方でわずかに広がる程度 (図9B). ……………

……………ムネミゾツブエンマムシ

2(1) 体は小さく 1.1-1.3 mm; 栗色; 前脛節は前方2/3が強く広がる (図9D). ……………

……………チャイロムネミゾツブエンマムシ

ムネミゾツブエンマムシ (図7B, 9A, B)

Plegaderus (Plegaderus) marseuli REITTER, 1877

図説 H: 222; ÔHARA, 1994: 211 [再記載, ♂交尾器].

キクイゾウムシの食害したエゾマツの樹皮下で10個体が一度に採集されたことがある. マツヤニに捕まった個体も採集されている. 分布: 北海道,

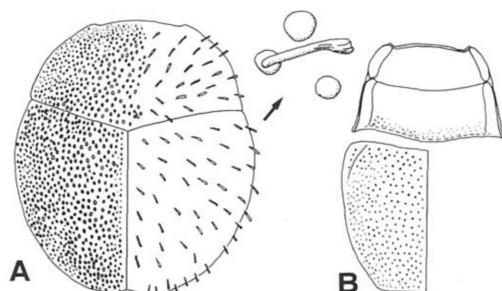


図7 A: クロツブエンマムシ, 前胸背と鞘翅, 背面, 右半分は点刻, 左は刺毛の分布を表わす. B: ムネミゾツブエンマムシ, 前胸背と左鞘翅, 背面 (ÔHARA, 1994 の電顕写真をトレース).

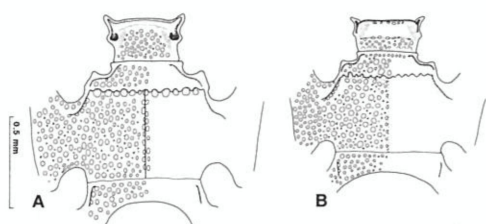


図8. A: クロツブエンママシ, B: コクロツブエンママシ. 前胸・中胸・後胸腹板 (OHARA, 1994 より).

本州, 四国, 九州.

チャイロムネミゾツブエンママシ (図9C, D)

Plegaderus (Plegaderus) shikokensis HISAMATSU, 1985

HISAMATSU, 1985: 5 [四国愛媛県石鎚山]; 図説 H: 222, 40-8; HIRANO, 1986: 42 [本州].

分布: 本州, 四国.

1-3-8-3. ヨフシツブエンママシ族 Acritini

10属約220種が知られる. 後附節が4節しかないことで区別される. 日本産については詳しい研究はなされていない. 日本から1属 *Acritus* 2種の記録があるが, さらに数種追加される.

ヨフシエンママシ属

Acritus J. L. LeCONTE, 1853

2亜属, *Pycnacritus* (9種) と *Acritus* (約110種) に分けられる.

アラメヨフシエンママシ

Acritus (Acritus) komai LEWIS, 1879

図説 H: 224.

分布: 九州, 南西諸島. 中国, 北アフリカ, フランス, マリアナ諸島, ハワイ, オレゴン, 南カリフォルニア.

クロヨフシエンママシ

Acritus (Pycnacritus) homoeopathicus WOLASTON, 1857

Acritus shogunus LEWIS, 1892: 357 [Japan]; 図説 H: 224, synonymized by MAZUR, 1987: 31.

分布: 北海道, 北アフリカ, 中央・南ヨーロッパ, コーカサス, ハバロフスク州.

参考文献 (Iで挙げたものは*を付け略した)

*久松定成 (HISAMATSU, S.) (1985). [図説 H].

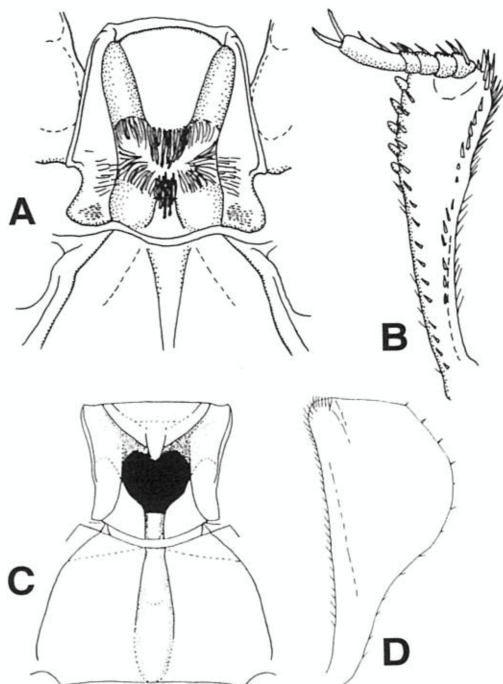


図9. ムネミゾツブエンママシ属. A, B: ムネミゾツブエンママシ (OHARA, 1994 の電顕写真をトレース), C, D: チャイロムネミゾツブエンママシ (HISAMATSU, 1985 より). A, C: 前胸・中胸・後胸腹板, B, D: 前脛節, 背面.

HISAMATSU, S., 1985. Notes on some Japanese Coleoptera, I. *Trans. Shikoku ent. Soc.*, 17 (1/2): 5-13.

平野幸彦 (HIRANO, Y.) (1986). チャイロムネミゾツブエンママシ本州に産す. 月刊むし, (187): 42.

LEWIS, G. (1892). On some new species of Histeridae. *Ann. Mag. Nat. Hist.*, (6)9: 341-357.

MAZUR, S. (1987). Description of a new *Pholioxenus* from Morocco with additional histerid notes (Col., Histeridae). *Entomol. Blätter*, 83(1): 28-32.

MAZUR, S. (1989). Random studies among the Histeridae (Coleoptera). *Elytron*, 3: 31-39.

*中根猛彦 (NAKANE, T.) (1963). [図説 N]

*OHARA, M. (1994).

(北海道大学昆虫体系学講座)

◇名古屋支部大会のご案内◇

日本鞘翅学会第22回名古屋支部大会を下記の要領で開催いたします.

日時: 平成10年3月8日(日) 12:30~16:30

会場: 豊橋市自然史博物館 (豊橋総合動植物園内)

交通: JR 二川駅から徒歩20分 (タクシー5分) または JR 豊橋駅より豊鉄バス「のんほいパーク前」下車.

内容: 招待講演 高橋和弘氏

「日本のジョウカイボン科—分類の現状—」ほか一般講演数題, 一人一話, 標本, 文献の回覧を行います. また終了後懇親会を予定しています.

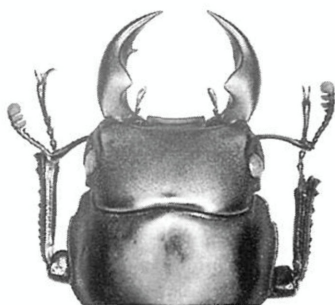
参加費: 無料 (回覧用の標本, 文献等をご持参ください)

問い合わせ: 穂積俊文 (小牧市小牧 1-578, ☎0568-76-3891) または 豊橋市自然史博物館 (☎0532-41-4747 長谷川道明まで)

○オオクワガタ×コクワガタの種間雑種の大顎に現れた興味深い形態

オオクワガタとコクワガタの種間雑種は、境野・川田(1982)以来現在まで、野外採集(幼虫採集を含む)及び、飼育による人工交雑によって得られた個体を併せて10編に及ぶ報告があり、形態的にも雄では小型から大型のものまで多くの例が知られている。特に人工交雑では、条件さえ良ければ比較的容易に雑種を作ることができるようで、報告されていないものも含めると、かなりの数に昇るものと思われる。

今回、ここに図示した個体も人工交雑によるもので、筆者が人より譲り受けたものである。一見して両種の雑種とわかるが、特に興味深いのは大顎の形態である。すなわち、全体的な大顎や他の部分は、従来知られた本雑種の小型のものとはほぼ同様だが、よく見ると大顎先端と三角形の内歯との間に、もう1つ非常に鋭い小突起があるのがわかる。左の方が顕著だが、右側にも対象に向かい合った位置に、僅かながら痕跡的な突起が認められる。また、通常の内歯は大顎断面で見た場合の上面から突出しているが、この小突起は下面の位置から出ている。ところがこのような例は、コクワガタではまれに出現することが知られており、仲田(1982)や奥田(1996)の報告があるほか、筆者の手もとの標本にも数頭が存在する。従って、この異常はコクワガタに固有のものと考えられることもできるが、本雑種個体との因果関係などはもちろんわからない。また、本個体は前



記のように人工交雑によるもので、1992年7月に羽化したという以外、詳細なデータは残念ながら不明である。

参考文献(コクワガタの大顎の異常に関するもの)

仲田丞治, 1982. 月刊むし, (141): 31.

奥田則雄, 1996. 月刊むし, (310): 9.

(鎌倉女学院, 境野広行)

○冬季採集で得られたオトシブミ類

オトシブミ類の越冬状況に関する報告は少ないが、筆者は埼玉県比企郡嵐山町において冬季採集の際に、オトシブミ科の3種を採集しているので報告する。また、群馬県赤城山のルイスアシナガオトシブミ冬季採集個体を検することが出来たので合わせて報告する。

1. *Cycnotrachelus roelofsi* (HAROLD) エゴツルクビオトシブミ

1♂, 嵐山町菅谷, 28. XII. 1992; 1♂, 同所, 11. I. 1997; 1♀, 嵐山町平沢, 31. XII. 1995.

2. *Euops konoi* SAWADA et MORIMOTO ナラリオトシブミ

1♂, 嵐山町菅谷, 28. XII. 1992.

3. *E. splendidus* Voss カシリリオトシブミ

1♂, 嵐山町鎌形, 13. II. 1997.

上記3種はいずれも筆者採集、保管。

4. *Henicolabus lewisii* (SHARP) ルイスアシナガオトシブミ

1♂, 群馬県富士見村赤城山(標高1,000m付近) 石川 忠採集、保管。

嵐山町のものはいずれもスギの生木の樹皮下より得られた。北側であり日の当たらない部分に潜り込む様に越冬していた。また、赤城山のルイスアシナガオトシブミは、赤城道路沿いにあるミズナラ林の林床にて、コケの下から得られた。本種の越冬例は他に、ケヤキの樹皮下や材の空洞で得られたものが知られているが、いずれも個体密度が少ないため、他にも好条件の越冬場所があるのではないと思われる。

末筆ながら、記録の公表について快諾された東京農業大学昆虫学研究室の石川忠氏に感謝申し上げます。

(埼玉県嵐山町, 豊田浩二)

○サトウヒメハナノミの伊豆大島から記録

サトウヒメハナノミ *Falsomordellistena satoi* (NAKANE) は本州, 四国, 九州, 下甕島, 屋久島に分布が知られる(畑山, 1985, 原色日本甲虫図鑑3, p. 394)が、伊豆諸島からは記録が見あたらないようである。筆者は次のように伊豆大島産の本種を所持しているので、ここに記録しておくことにする。

1♂, 伊豆大島, V. 1996, 阿達直樹採集。

この標本は横浜市の秋山黄洋氏を介して筆者に届けられた。貴重な標本を恵与された伊豆大島在住の阿達直樹氏ともどもお礼を申し上げる。

(神奈川県立博物館〔自然〕, 高桑正敏)

根室半島で採集されたクナシクロチビジョウカイ (和名新称)

高橋 和 弘

過日、筆者は北海道芽室町在住の伊藤勝彦氏からジョウカイボン科の標本の同定を依頼されたが、その中に北方領土を除いた日本から初めて記録されるジョウカイが含まれていたのを、記録しておきたい。

クナシクロチビジョウカイ (和名新称) *Malthodes nikitskyi* KAZANTZEV, 1995

2♂♂, 北海道根室市瀬臥牛林道音根別川付近, 29. VI. 1996, 伊藤勝彦採集。

本種はKAZANTZEV (1995) によって、国後島から記載された種である。国後島はいわゆる北方領土の一つで、公式見解では日本の領土であり、本来なら記載された時点で日本のファウナに加わっていた種である。しかし、国後島は日本人が自由に立ち入って採集できる場所ではないことから、とりあえず日本人が行ける範囲内での新記録 (北海道新記録) として記録しておくこととする。

千島列島と根室半島は、昆虫相の面で共通する部分がかなりあるようであるが、本種の分布もその一つの証になるかもしれない。なお、本種の原因記載には雄交尾器が図示されているが、簡略なものである。北海道産の第8腹板と雄交尾器の形状を図1、2に示す。

本種は、♂の第8腹板の形態からはヒコサンチビジョウカイ *M. hikosanus* TAKAKURA に類似するが、中央部の幅がやや細いことで区別できる。一方、交尾器の形態の比較では、ヒコサンチビジョウカイはナガチビジョウカイ *M. longipes* WITTMER に近い種であるのに対し、本種はどちらかといえばムナミゾクロチビジョウカイ *M. sulucicollis* KIESENWETTER に近い種と思われ、両者は明らかに違う系統に属している。

なお、本種にきわめて形態の類似する未記載種 (奈良県春日山産) が筆者の手元にあり、本種の亜種になる可能性も考えられるが、今後より詳しい検討が必要である。末筆ではあるが、記録の公表を快諾いただいた伊藤勝彦氏ならびに文献でお世話になった名古屋女子大学の佐藤正孝教授に厚くお礼申し上げます。

文 献

KAZANTZEV, S., 1995. New taxa of Palaearctic *Malthodes* (Coleoptera, Cantharidae). *Ent. Basil.*, 18: 99-108.

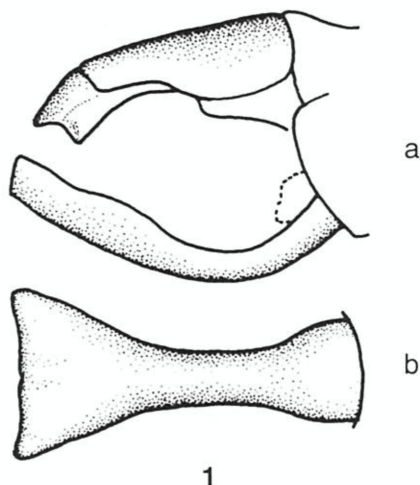


Fig. 1. Eighth sternite in male of *Malthodes nikitskyi* KASANTZEV (a: lateral view, b: ventral view).

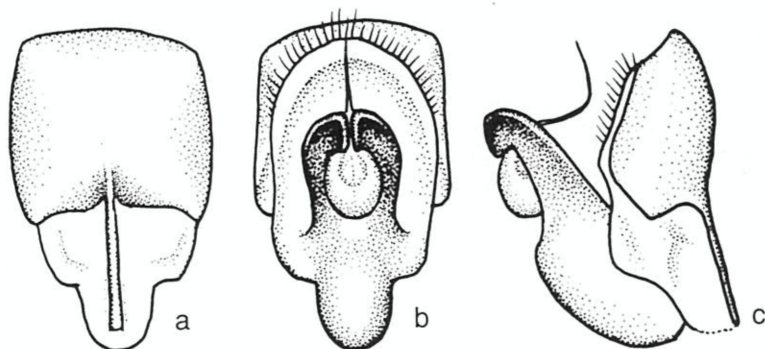


Fig. 2. Male genitalia of *Malthodes nikitskyi* KASANTZEV (a: ventral view, b: dorsal view, c: lateral view).

(神奈川県平塚市)

○シロアリハネカクシを新潟県湯沢町で採集

シロアリハネカクシ *Trichopsenius japonicus* SEEVERS は、ヤマトシロアリ *Reticulitermes speratus* (KOLBE) の巣に寄生するハネカクシで、日本の "Kinschin" から記載された (SEEVERS, 1957). NAOMI & TERAYAMA (1986) は本種を栃木県真岡市、神奈川県逗子市・鎌倉市、静岡県天城山から記録したが、これまでに本種の日本海側からの記録はないようである。筆者は新潟県湯沢町で本種を採集したので報告する。

シロアリハネカクシ 1 頭、新潟県南魚沼郡湯沢町清津川八木尾沢 (約 1,000 m), 23. VI. 1996, 芳賀馨採集, 直海俊一郎同定, 保管 (写真 1)。

ヤマトシロアリ 1♂, 同上データ, 直海俊一郎同定, 保管。

採集地点の沢は苗場山の前衛峰の一つである八木尾山から清津川の左岸に流入する急勾配の支川で、植生はブナ自然林であるが、豪雪の影響を受けてやや疎林状になっている。採集地点のヤマトシロアリの巣 (写真 2) は、胸高直径約 50 cm のブナ生木の根元付近に生じたもので、表層付近は手で崩せる程度に食害を受けていた。シロアリハネカクシは、食害された部分の表層の、厚さ約 2 cm の木片を引きはがしたところ、その裏面から見出された。その後しばらく注意して巣を観察したが、追加個体は得られなかった。



末筆ながら、本種および宿主を同定して下さり発表を勧められた直海俊一郎博士、文献の入手に便宜を図って下さり種々助言を下された岩田隆太郎博士に心からお礼申しあげる。

引用文献

NAOMI, S.-I. & M. TERAYAMA, 1986. Taxonomic study on the Subfamily Trichopseniinae (Coleoptera, Staphylinidae) of Japan, with Descriptions of three new species. *Kontyû*, 54: 697-705.

SEEVERS, C., 1957. A monograph on the termitophilous Staphylinidae (Coleoptera). *Fieldiana Zool.*, 40: 1-334.

(埼玉県浦和市, 芳賀 馨)

○西表島のハネカクシ 7 種

1993 年 9 月 碓井 徹氏 (埼玉昆虫談話会会員) が西表島での半翅類採集の折に得られた若干のハネカクシを筆者に恵与されたが、同島から初めて記録される種 (※印) も含んでいるので、発表しておきたい。報告にあたり、採集品を快く提供された碓井徹氏ならびにお忙しいなか標本の一部を同定し、種々ご教示くださった直海俊一郎氏 (千葉県立中央博物館) に厚くお礼を申し上げる。

1. *Tetrabothus japonicus* NAKANE, 1991
コンボウヒゲブトハネカクシ※ (直海氏同定)
3 頭, 船浦, 27. IX (灯火採集).
2. *Carpelimus vagus* (SHARP, 1889)
ニセコムシセミゾハネカクシ※
1 頭, 西フナツキ川, 29. IX.; 4 頭, 美田良, 29. IX (灯火採集).
3. *Philonthus discoideus* GRAVENHORST, 1802
チビカクコガシラハネカクシ
1♂, 船浦, 27. IX (灯火採集).
4. *Philonthus lewisius* SHARP, 1874
オオドウガネコガシラハネカクシ
1♂, 3♀, 船浦, 27. IX (灯火採集).
5. *Philonthus quisquiliaris* (GYLLENHAL, 1810)
※ (直海氏同定)
2♀, 船浦, 27. IX (灯火採集); 5♂, 2♀, 美田良, 29. IX (灯火採集).
6. *Pinophilus punctatissimus* SHARP, 1889
オオクビブトハネカクシ※
1 頭, 船浦, 28. IX (灯火採集).
7. *Pinophilus rufipennis* (SHARP, 1874)
アカバクビブトハネカクシ※
2 頭, 船浦, 27. IX (灯火採集).

参考文献

- 柴田泰利, 1990. 西表島から採集されたハネカクシ. 甲虫ニュース, (92): 5-6.
中根猛彦, 1991. 日本の雑甲虫覚え書 8. 北九州の昆蟲, 38 (2): 111-112 (図版 1-3).

(埼玉県富士見市, 小田 博)
編集部注) 1997 年 7 月 26 日受理

オオナガコメツキ族・属の高次分類について (コメツキムシ科)

大 平 仁 夫

コメツキムシ科のオオナガコメツキ族 tribe Elaterini は、古くは亜科として扱われていたが、最近では STIBICK (1979) の分類体系に従って族として用いられることが多くなっており、KISHII (1987) の研究でもこれに従っている。KISHII (1987) によれば、この族に世界で約 40 属が含まれるとしており、日本産として *Neotrichophorus* 属 (図 1A), *Elater* 属 (図 1C), *Sericus* 属 (図 1D), *Vuilletus* 属 (図 1B), *Chiagosnius* 属 (図 1F), *Dolerosomus* 属 (図 1E) の 6 属を含めている。

大平 (1971) は「この亜科は非常に特徴がつかみにくい亜科であるが、幼虫の第 9 腹節の末端がスムーズに円まるものはすべてこの亜科に入る」としており、筆者のこの考えは現在でも変わりが無い。しかし、この特徴は幼虫を基準にしたものであることと、幼虫が判明しないと所属の判断が正確にできないため、成虫においてこれに代わる特徴を見いだすための調査をしてきた結果、大顎の形態に共通した特徴のあることを見いだした。成虫の大顎は図示

したように、小歯の大きさなどは左右で若干の相違がみられる (図 1C)。しかし、基本的な形態は左右相同である。本族の種は、大顎は基部が著しく幅広くて扁平状を呈している。一般に小歯の発達が悪く、痕跡的かときに消失する。また、小歯の内側は浅く切れ込むのみである (図 1A-D の ↑ 印)。その他、大顎の基部上面の微小突起群は内縁寄りにきわめてよく発達する (図 1C の ↑↑ 印)。

これらの特徴をもとに、従来の分類に従って本族内の属の分類を試みると、KISHII (1987) が本族に含めた *Chiagosnius* 属 (図 1F) と *Dolerosomus* 属 (図 1E) の両属はこの族には含まれないことになる。*Dolerosomus* 属の幼虫は大平 (1962) が明らかにしており、*Chiagosnius* 属の幼虫は高野・柳原 (1939) が明らかにしているが、これらの幼虫の第 9 腹節の末端はいずれも細まって多少ともとがっている。

KISHII (1987) は族の特徴として前胸腹側板線の前端部が凹溝状をしていないことをあげているが、

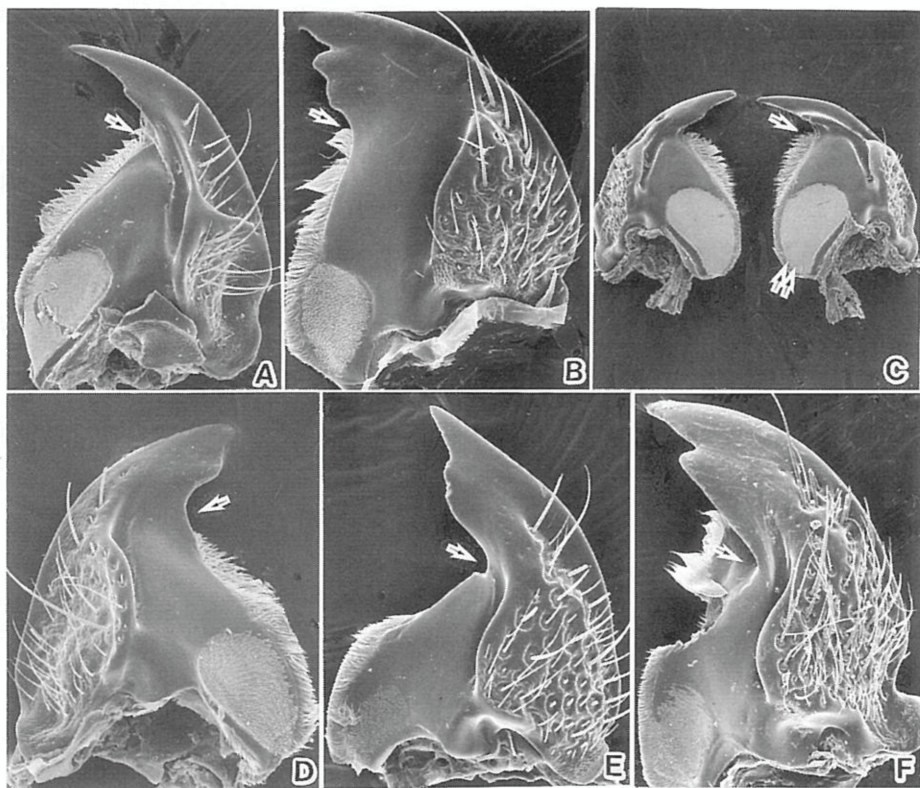


図 1. 大顎の背面 (A, B, E, F は右, C は左右, D は左)。A, ヒゲナガコメツキ *Neotrichophorus junior junior*; B, ミドリヒメコメツキ *Vuilletus viridis subopacus*; C, オオナガコメツキ *Elater sieboldi sieboldi*; D, コガネホソコメツキ *Sericus bifoveolatus*; E, キバネホソコメツキ *Dolerosomus gracilis*; F, ツヤコメツキ *Chiagosnius obscuripes*。

筆者はこれら両属は本族のものとは系統を異にするもので、分離して別の族のものとして扱うのがよいと考える。分類上の処理については、本科の他の族の位置全般の見直しとも深く関連するので、その折に一括して処理する考えである。同好者のご指導も頂けたら幸いである。

引用文献

KISHII, T. 1987. A Taxonomic study of the Japanese Elateridae (Coleoptera), with the keys to the subfamilies, Tribes and Genera, Kyoto: 1-262, 12 figs.

大平仁夫, 1962. 日本産コメツキムシ科の幼虫の形態学的ならびに分類学的研究: 1-179, 61 pls.

——, 1970. 日本のコメツキムシ (IX). 昆虫と自然, 6 (9): 18-24.

STIBICK, J. N. L. 1979. Classification of the Elateridae (Coleoptera). Relationships and classification of the subfamilies and tribes. *Pacific Ins.*, 20(2-3): 145-186.

高野秀三・柳原政之, 1939. 台湾甘蔗害虫編. 甘蔗の害虫並に有害動物に関する調査研究: 1-311, 18 pls. (台湾蔗作研究会)

(愛知県岡崎市)

○セボシジョウカイとオカベセボシジョウカイの分布に関する追加記録

セボシジョウカイ *Athemus vitellinus* は琉球列島を除く日本各地、および韓国に分布し、平地から山地にかけて普通に見られる種である。高橋(1992)により本種と外観の酷似するオカベセボシジョウカイ *A. okabei* が記載されて以来、両種の記録についての再確認がなされてきた(平野, 1994; 奥島, 1996, 1997)。両種は主に、交尾器の形態によって区別され、高橋(1992)および奥島(1996)により図示されている。筆者はこれまでに記録のないと思われる八丈島からのオカベセボシジョウカイ、および下飯島からのセボシジョウカイの標本を検しているので記録しておきたい。

1. オカベセボシジョウカイ *A. okabei* TAKAHASHI

1♂, 東京都八丈島八丈町中之郷裏見ヶ滝, 1. V. 1997; 18♂♂3♀♀, 同所, 3. V. 1997; 2♂♂, 三原山, 2. V. 1997; 10♂♂3♀♀, 八丈植物公園, 2. V. 1997, いずれも筆者採集。

本種はこれまで、主に本州の関東周辺の太平洋岸および伊豆諸島の御蔵島まで分布することが知られており、八丈島からの記録はこれまでのところ本種の南限と考えられる。なお、色彩変異については本州と伊豆諸島の三宅島や御蔵島産と同様に、伊豆諸島大島産のように黒斑が発達する個体は見られなかった。

2. セボシジョウカイ *A. vitellinus* (KIESENWETTER)

8♂♂5♀♀, 鹿児島県下飯村尾岳, 18-20. V. 1994, 上野輝久採集。

なお、検視個体の色彩変異については壱岐、対馬、上飯島および韓国産と同様に、上翅に黒条の現れるものは見られなかった。

末筆ながら、貴重な標本を御恵与いただいた九州大学の野上輝久氏、ならびに発表に際して御教示を賜った倉敷市立自然史博物館の奥島雄一氏、九州大学の小島弘昭博士に厚くお礼申し上げます。

参考文献

平野幸彦, 1994. セボシジョウカイとオカベセボシジョウ

カイの分布. 月刊むし, (279): 38-39.

奥島雄一, 1996. セボシジョウカイとオカベセボシジョウカイ(コウチュウ目, ジョウカイボシ科)の分布と色彩変異. 倉敷市立自然史博物館研究報告, (11): 1-13.

奥島雄一, 1997. セボシジョウカイとオカベセボシジョウカイ(コウチュウ目, ジョウカイボシ科)の追加記録. 倉敷市立自然史博物館研究報告. (印刷中)

高橋和弘, 1992. 神奈川県ジョウカイボシ科. 神奈川虫報, (100): 71-124.

(九州大学, 高橋直樹)

○千葉県甲虫類4種の採集記録

千葉県で採集した甲虫類を報告する(1以外は県初記録). 採集者は全て筆者である。

1) チバクギヌキヒメジョウカイモドキ

Ebaeus chibaensis NAKANE

5頭, 丸山町石堂, 12. IV. 1997.

ホロタイプ(中根, 1989)は千葉県鋸山産であるが、県下では他地域での採集例がない。花の咲いていないツバキの生木から採集した。

2) カタアカチビオオキノコ

Tritoma kensakui CHÔJÔ

4頭, 鴨川市切通, 28. VI. 1997.

クヌギの倒木に生じた白い幼菌から採集した。

3) ヨツボシヒメクキムシ

Mycetochara collina LEWIS

1頭, 君津市郷台畑, 9. VII. 1995.

モミとツガを主体とする原生林で叩き網を行なって採集した。

4) カタモンヒメクキムシ

Mycetochara mimica LEWIS

1頭, 鴨川市切通, 5. VII. 1997.

捕虫灯による灯火採集を行ない、21:00頃得た。末筆ながら、チバクギヌキヒメジョウカイモドキを同定して下さった大桃定洋氏に厚くお礼申し上げます。

参考文献

中根彦彦, 1989. 日本の雑甲虫覚え書5. 北九州の昆虫, 36 (3): 150.

(東京都足立区, 木元達之助)

○クロホシモブトハムシの食草について

クロホシモブトハムシ *Zeugophora chujoi* は、「日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説」(1994)によれば、飯豊山より記載された稀な種で、その後、神奈川県箱根、三重県平倉などから記録されている。筆者らは1987年4月25日と1988年5月1日に埼玉県秩父両神山で多数の本種を見つけ、そのうち十数頭を採集した。これについては、すでに記野が報告している(記野, 1994)。

また、同図説では食草が「マサキ?」となっており、食草を確認するために、1996年4月27日と1997年5月1日に同所を訪れた。マサキ *Euonymus japonicus* を念入りに探したが、2回とも少数が見られただけで、現地で摂食は確認できなかった。そこで、1997年にマサキと共に生かして持ち帰り、飼育下でマサキの葉を摂食する事を確認した。したがって、マサキが本種の食草であることは確かだと思われる。ただ、同所のマサキは祠のまわりなどに人為的に植栽されたもので、それがなぜ食草になったのだろうか。新潟県では、同じニシキギ科のコマユミ *Euonymus alatus* f. *ciliatodentatus* が食草として確認されている(大野私信, 未発表)。したがって、両神山ではマサキとは別のものも食草としている可能性もある。今後も調査を続けていきたい。



末筆ながら、本種の同定をしていただき、色々と教示いただいた東洋大学の太田正男先生、マサキの同定をしていただいた国際基督教大学の庄司太郎先生、庄司先生への仲介の労をとっていただいた同大学の加藤義臣先生に厚くお礼申し上げます。

参 考 文 献

- 木元新作・滝沢春雄, 1994. 日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説. 東海大学出版会.
記野直人, 1994. 埼玉県内における甲虫類の採集記録. 寄せ蛾記, (70).
(東京都武蔵野市, 長谷川 洋; 東京都杉並区, 記

野直人)

○アカアシヒゲナガゾウムシの北海道からの記録

これまでに、北海道から記録のないと思われるアカアシヒゲナガゾウムシ *Aracercus tarsalis* SHARP を採集しているので報告する。

1♀, 北海道石狩郡石狩町4線, 6. VI. 1980; 1♀, 北海道千歳市モラップ, 2. VI. 1995.

いずれも、枯れ枝のピーティングにより得た。前者の採集地は、石狩湾の海岸線沿いに伸びる広葉樹林で、後者は山間部にある広葉樹に針葉樹を交えた混交林内で採集した。したがって、本種は道内各地に生息する可能性がある。

本報告に対してご助言いただいた妹尾俊男氏に、お礼申し上げる。

(茨城県竜ヶ崎市の、高野 勉)

○ミナミキバナガミズギワゴミムシの生態観察例

筆者は、西表島の仲間川上流で、ミナミキバナガミズギワゴミムシ *Armatocillenus seticornis* (LINDROTH) の興味のある生態観察をしたので報告する。

大富より、仲間川上流へボートをチャーターして仲間川が溪流になるところで降り、付近を採集した。木陰の砂山で迎えるのボートを待っていると、陽のあたったみずぎわの砂地に本種が忙しく走り回っていたので何頭か採集した。満潮の時刻になったのか生温い水が見る見る迫ってきたので、採集を中止して水が来ない砂山の上に荷物ごと避難した。本種が隠れている小石にも水が迫ってきたので、本種も避難するだろうと思ったがそのまま水没してしまった。見ていた同行のセミ屋の上田四朗氏は「息の長い虫やなあー」といわれたがまったくその通りで、次の干潮まで水の中の小石の下でじっとしているのであろう。また、川には魚が多く(フグまで泳いでいた)うっかり浮かび上がるものなら魚の餌になるのは間違いないと思う。あらゆる環境にも対応できる昆虫類に改めて感じ入った次第である。

データー: 30頭, 沖縄県八重山郡西表島仲間川上流, 13. VII. 1996, 筆者採集。



(兵庫県西宮市, 田中 稔)

○ハネアカブチヒゲハネカクシの大量採集例

ハネアカブチヒゲハネカクシ *Anisolinus tsurugiensis* は四国の徳島県剣山から採集された3♂♂, 3♀♀の個体に基づいて、1961年に澤田高平博士によって記載された種である。この時の記載に用いられた個体の中で、別基準標本はサルノコシカケ科のキノコから、また副基準標本は1,600 mと1,000 mの標高地の朽木の樹皮下からそれぞれ得られたことが報告されている。その後本種に関する記録としては、1971年に吉田正隆氏が剣山の両剣谷(行者)及び愛媛県皿ヶ嶺を本種の分布地として報告し、1976年には田中正陽氏が同じく剣山の両剣谷から得られた2個体を記録している。次いで1978年には吉田正隆氏により徳島県の高越山が本種の分布地として加えられ、さらに1994年には長持峠(剣山)でベイトトラップ(10% カルビス+10% 氷酢酸)によって採集された2個体が報告されている。一方、直海俊一郎博士は1981年に1♀♀を愛媛県石鎚山から初めて記録し、さらに1991年に本種が含まれる *Anisolinus* 属に関する論文の中で6個体を剣山から、また石鎚山(面河溪)の落葉樹林帯から得られた16個体をそれぞれ記録している。

本年、筆者の一人佐藤がナガゴミムシ類の採集のために訪れた石鎚山系の岩黒山で、たまたま多数の本種を採集したので、採集データーと共にそれらの生息環境について報告しておきたい。採集場所は土小屋の南東、道路をはさんだ高野火砕流域で、標高1,500 mほどの沢の源頭域で、地下水流の上面を覆っている岩盤のひび割れ状態のすき間をこじ起した所、次から次へと多数の本種がはいってきた。得られた個体の採集データーは下記の通りである。

37♂♂, 39♀♀, 愛媛県面河村岩黒山, 22. IX. 1997, 佐藤陽路樹採集。

参考文献

- NAOMI, S., 1981. On the genus *Anisolinus* SHARP (Coleoptera, Staphylinidae), with description of a new species. *Kontyû, Tokyo*, 49: 109-115.
- , 1991. Phylogeny and biogeography of the genus *Anisolinus* SHARP (Coleoptera: Staphylinidae) of Japan. *Bull. Biogeogr. Soc. Japan*, 46: 1-19.
- SAWADA, K., 1961. Two new species of the genus *Anisolinus* SHARP from Japan (Col.: Staphylinidae). *Ent. Rev. Japan*, 13: 4-6, with 1 pl.
- 田中正陽, 1976. 徳島県の昆虫 甲虫類(鞘翅目). 徳島県博物館収蔵資料目録自然史部門昆虫綱第六輯, 80+2 pp. 徳島博物館.
- 吉田正隆, 1976. ハネカクシ科(剣山とその周辺の甲虫). 剣山県民の森総合学術調査報告書, pp. 152-156. 徳島県.
- , 1978. 鞘翅目(植物・動物目録). 高越山の昆虫, pp. 49-77. 日本生物教育学会徳島県支部.
- , 1994. 2等三角点長持峠の昆虫. 徳島県昆虫, (6): 19-21.
- (東京農大, 渡辺泰明; 東京都世田谷区, 佐藤陽路樹)

○*Astenus (Eurysunius) setifer* CAMERON (ハネカクシ科)を東京都町田市で採集

Astenus setifer CAMERON は兵庫県神戸市篠原からの標本をもとに記載されたアリガタハネカクシ亜科の特異な形態の種で、神戸の他に東京都大田区と千葉県浦安市の記録しか知られていない珍しい種である。筆者は本種を町田市から採集することができたので報告する。

1♀♀, 東京都町田市野津田町野津田公園, 25. VIII. 1997, 柴田泰利採集。

野津田公園は市の北部の丘陵地にあり、すでに完成している陸上競技場の他に未整備の区域(第二期整備区域)がある。本種はこの第二期整備区域内の北東に開けたやや平らな草原に放置されていた板切れの下から採集された。その後もこの場所で数回の採集を行ったが、追加の個体は採ることが出来なかった。

参考文献

柴田泰利, 1995. *Astenus setifer* CAMERON という名のハネカクシ. 甲虫ニュース, (111): 1-3.

(東京都町田市, 柴田泰利)

○夜間キノコに来るオオメヒメハナノミ

オオメヒメハナノミ *Glipostena pelecotomoidea* (Pic) は、一見ヒメハナノミ類とは思えないほどの大型種である。灯火に飛来したものが得られているが、その生態については未知である。

筆者は、夜間のキノコに集まる甲虫類を採集した際に、ヤキフタケと思われる多孔菌類に飛来した本種を得ることが出来たので、ヒメハナノミ類がキノコ類に集まる例として報告する。



1頭, 埼玉県嵐山町菅谷, 30. VII. 1996; 1頭, 同所, 1. VIII. 1996, いずれも豊田浩二採集, 保管。

コナラの薪を立ててある所にびっしりとキノコが生えており、その隙間に潜り込んでいた。動きは非常に俊敏で、薪の周囲を飛び回る光景も見られた。

なお、本種の埼玉県における記録は、筆者の知る限りではこれが初めてのようである。

末筆ながら、本種について御教示頂いた神奈川小田原市の荏部幸世女史に厚く御礼申し上げる。

(埼玉県嵐山町, 豊田浩二)

○沖縄本島のハネカクシダマシの採集記録

沖縄本島からはチビカワムシ科ハネカクシダマシ亜科の甲虫は2種が記録されている(佐々治, 1988). 筆者らの調べた限りでは, これら2種の採集例は数頭しかないようなので, 採集記録を報告する.

1. アトモンハネカクシダマシ *Inopeplus uenoi ohbayashii* HATTA

9頭, 名護市羽地大川, 21. III. 1997, 吉富採集. 貯木場にて採集した. ほかに数個体を目撃しているが, 採集した個体も含めてすべて数本のアカメガシワの材にのみ見られた.

2. オバケハネカクシダマシ *Uruminopeplus sakaii* SATO et HATTA

1頭, 国頭村照首山林道, 5. IX. 1997, 杉原採集; 1頭, 国頭村伊江林道, 3. IX. 1997, 杉原採集; 4頭, 同上, 4. IX. 1997, 杉原採集.

以上の個体は, すべて谷筋に仕掛けたボックスライトトラップにて採集された. 本種は SATO et HATTA (1988) により 1♂1♀にて記載されたが, そのタイプ標本も10月に採集されたものであることから, 秋季にのみ出現する種なのかも知れない.

引用文献

- 佐々治寛之, 1988. 福井虫報, (3): 45-51.
 SATO, M. & K. HATTA, 1988. *Elytra*, Tokyo, 16: 86-87.
 ((株)環境指標生物, 吉富博之; 東京農業大学, 杉原英行)

○奥多摩御岳山でラミーカミキリを採集

近年ラミーカミキリの北・東方への分布域拡大が指摘され, 神奈川, 山梨, 埼玉の三県からの採集例が報告されている. 東京都内からは松田邦雄 (1994, 月刊むし, (286): 20; 1997, 同 (318): 38) によって高尾・陣馬山麓から, また原島真二 (1997, 月刊むし, (318): 38-39) によって西多摩郡檜原村からそれぞれ記録されているが, 筆者も下記の通り本種を採集しているので, 本種の分布域拡大の1資料として記録しておく.

1♀, 奥多摩御岳山, 20. VII. 1997, 筆者採集.

採集した場所は御岳山ケーブル駅から御岳神社に到る参道の途中で, 標高約820mほどの地点である. (東京農大, 渡辺泰明)

○宮古島におけるクニヨシシロオビゾウムシの記録

クニヨシシロオビゾウムシ *Cryptoderma kunyoshii* は, MORIMOTO (1978) によって西表島産の2♂♂1♀に基づいて記載されたオサゾウムシ科の甲虫である. 現在までに, 同島以外に沖縄本島(谷角, 1985)と石垣島(早川, 1985; 上野, 1991; 大塚, 1992)からその分布が知られているが, その他の島々からの記録はないようである. 筆者は宮古島産の標本を検査する機会に恵まれたので報告する.

1頭, 沖縄県宮古島平良熱帯植物園付近, 8. V. 1993, 金子義紀採集.

植物園周辺の農道で採集されたものである. 沖縄

昆虫野外観察図鑑(東, 1987)によると, 本種の成虫は谷筋のホシダ群落に局地的に分布しており, 各生息地における個体数は多く, ホシダを摂食するというのである.

末筆ながら, 貴重な標本を恵んでくださった緑生研究所の金子義紀氏に感謝申し上げる.

参考文献

- 東 清二, 1987. 沖縄昆虫野外観察図鑑第2巻: 234.
 早川浩之, 1988. 甲虫ニュース, (81): 6-7.
 MORIMOTO, K., 1978. *Esakia*, (12): 103-118.
 大塚 篤, 1992. 月刊むし, (252): 38-39.
 谷角素彦, 1985. 甲虫ニュース, (70): 6-7.
 上野勝広, 1991. 月刊むし, (250): 22-23.
 (東京農業大学, 吉武 啓)

◇大会報告◇

日本鞘翅学会第10回記念大会は1997年11月15日(土)~16日(日)の2日間, 小田原市の神奈川県立生命の星・地球博物館にて開催された.

今回は第10回目の記念大会ということで, 例年になく規模を拡大し, 盛りだくさんの催し物を組み入れた. 口頭発表, 展示発表, シンポジウム, 同定会, 分科会, 標本展示, 懇親会などである. 初日は13時より総会, 14時から展示発表紹介, 口頭発表と続き, 17時より懇親会が開催された. 次の日は10時より同定会, 13時からシンポジウム「日本列島における甲虫の多様性」, 15時45分から分科会が行われた. 驚くべきは参加者で, 何と会員が179名, 会員外37名, 合計216名だったことである. このほかにも一般の人の参加があったので, 総勢250名近くだったと思われる. したがって, 懇親会などは押すな押すなの盛況で, 立錫の余地もなかったほどである. シンポジウムも満員という喜ばしい状況で, 同定会も珍しい標本が持ち込まれ, おおいに賑わった. 大会最後の分科会も10部門にわたり, 盛り上がりを見せた. 標本展示も普段見られない見事なコレクションの数々が披露された. こうして2日間の記念大会は無事, 成功裡に閉幕した. シンポ



シンポジウム「日本列島における甲虫の多様性」の様子 (大木氏撮影)



パネラーの話しに聞き入る聴衆(大木氏撮影)

ジウム、発表内容はここでは述べてないが、要旨集を発行したので希望者はTTSで購入されるとよい。

今回の記念大会にあたり、ご協力いただいた神奈川県立博物館はじめ、受付、準備、お茶のサービスなど手伝っていただいた会員、会員外の人々に感謝の意を述べたい。また、8ヶ月も前から準備に取りかかった実行委員の方々にも、厚くお礼を申し上げます。(企画担当、平野幸彦)

◇ゾウムシ研究家、小田原に集まる◇

大会2日目午後3時45分より、長テーブルを口の字にすることからゾウムシ分科会は始まった。まず森本 桂先生の近況をまじえた挨拶の後、集まった20名の自己紹介と続いた。論文や私信では知っている会友のは初めてという方も多かった。

前半は九州大学の小島弘昭博士による、ゾウムシ類の高次分類(研究者間における取り扱い方の違い)についての解説や日本のゾウムシ科の亜科の分類についての解説があった。また、種数についても述べられ、世界にゾウムシ類は6万種いて全動物の5%を占めるそうである。

後半は、「日本近隣地域のゾウムシ類に関する最近の報告」と題したお話が森本先生よりあった。韓国、極東ロシア、中国、東南アジア、オーストラリア、ニュージーランドから最近出された出版物と研究の現状などについての話題であった。新鮮な情報ばかりで、レジュメもたいへん有り難かった。



ゾウムシ分科会の様子



同定会で森本先生に群がるゾウムシ屋

お二人の話はたいへん示唆に富んでおりアマチュアゾウムシ研究家を大いに刺激した。

大会企画上の改善点として、せっかく全国から集まって来ているので、分科会にもっと時間をとり、ゆっくり話の輪を広げる時間的余裕が欲しかった。

また、この日の午前中は標本同定会が行われたが、日頃どうしても種名の分からないゾウムシをこの機会に森本先生に同定して頂こうと順番待ちが絶えなかった。それぞれの種について懇切丁寧にご教示して頂いたが、中には先生を悩ます標本もあったようだ。午後からのシンポジウムの基調講演と座長をおひかえになった森本先生のパワーは、正しく超人というほかなかった。

ゾウムシ分科会出席者: 森本 桂、江本健一、堀川正美、吉武 啓、片山 修、斎藤修司、中村裕之、田中敏明、的場 績、市橋 甫、官能健次、吉原一美、早川浩之、小島弘昭、野津 裕、佐藤顕義、金子直子、原島真二、越山洋三、妹尾俊男。

(レポーター、妹尾俊男)

日本鞘翅学会

会費(一カ年) 6,000円、次号は1998年3月下旬

発行予定

発行人 佐藤正孝

発行所 日本鞘翅学会 東京都新宿区百人町 3-23-1

国立科学博物館昆虫第1研究室

電話(3364) 2311、振替 00180-3-401793

印刷所 (株)国際文献印刷社

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0.1, 2, 3, 4, 5, 6号、有頭ダブル針も出来ました。その他、採集、製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 00130-4-21129

電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)

FAX (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社